

## ライデン大学考古学科の大学院教育

——構造・目的・批判

J. L. ビントリフ  
(柴田淑枝訳)

ライデン大学

**司会者：**それでは時間になりましたので、始めたいと思います。今日は講師として、オランダのライデン大学からジョン・ビントリフ先生をお招きしています。先生には、4年前にも研究科プロジェクトによる招聘で名古屋に来ていただきました。今日の午前中には、ご専門であるギリシアの地域踏査に関するご講演がありましたが、これからは、ご案内のように、ライデン大学考古学科の大学院教育についてお話しいただきます。

初めにビントリフ先生について、簡単にご紹介させていただきますと思います。先生は、ケンブリッジ大学で考古学を学ばれました。当時ケンブリッジ大学にはデイヴィッド・クラークを筆頭とする大変に有名な理論考古学の先生方がいらっしやって、現在のビントリフ先生の強い理論指向はそのようなところに由来しているのではないかと思います。また、そのころから環境考古学にも関心を向けられ、当時、エリック・ヒッグズというエピルスの旧石器時代の調査をした研究者がいたのですが、そのような先生にも学んでいらっ

しゃいます。その後、卒業されてからブラッドフォード大学に就職され、そこで講師からリーダー、日本という准教授までされました。その後、今日この話が出るのかどうか分かりませんが、イギリスの大学改革でブラッドフォードの人文系がつぶされたときに、ダーラムへ移られました。そのダーラムを経て、1999年から現在に至るまで、ライデン大学の教授をされています。

研究については、もう改めてご紹介するまでもありませんが、ギリシア考古学、とりわけフィールド踏査のエキスパートとして、国際的にも大変著名な方です。それ以外に、考古学理論についても、これまでたくさんの著作を發表されています。

これからお話しいただく内容は専門の研究の話ではなく、実は先生も最初あまり乗り気ではなかったのですが、私の方でどうしても大学院教育についてお話してくださいとお願いし、お引き受けいただきましたので、お礼を申し上げたいと思います。それでは、始めましょうか。

### オランダの大学院教育

**ビントリフ：**わかりました。このたびは、私たちの考古学科の大学院教育に関して関心をもってください、誠にありがとうございます。この点に関してこれからお答えすることになりますが、私自身は自分の大学での教育が必ずしも完全であるとは思っていませんし、他の大学のようにうまく機能しているとも思っておりません。ですので、まずは率直に、学部の構造、組織、そしてスタッフについてのご説明をさせていただきます。もちろん、まじめに机に向かい、学生たちの声に熱心に耳を傾ける人々のサポートがあつての学部だと思いますが。

大学院の公的な役割は、MAやResearch Master(RMA)だけでなく(RMAというのは、2年課程のMAのプログラムをさらに進めたもので、Master of Philosophy

のようなものだと思って下さい)、PhDの学生を教育するところにあります。そのため私たちは、PhDの学生たちに、研究をさせるだけでなく、教育的なプログラムを受けさせています。これはアメリカ的な考え方を借りてきているわけです。

**司会者：**それはコースワークのことですか？

**ビントリフ：**コースワークとかコースですね。つまりプログラムのことですが、単にRMAの学生のために設定されているだけではなく、多くはPhDのためにも構成されています。PhDの学生たちも、コース、コースワークに参加しなければいけません。ですので大学院としては、そのプログラムがうまくいっているか、すべての学生のためのプログラムになっているか、といったことに気を配っています。プログラムには一般的な部分があつて、そこは全ての学生が参加しなければいけません。それから、RMAやPhD向けの

ワークショップがあります。そこでは、外部からの講師による隔週のセミナーが開かれます。そして年に1～2回、2日間にわたるワークショップが開かれます。これには通常、学外から1～2名の講師を招きま

す。隔週とか年2回にわたっていくつかのセミナーや行事を開催する際には、院生が交流を持ったり質問を重ねたりすることが求められますが、同時に開催前の準備も求められます。たとえば、あらかじめ読むべき教材が与えられたり、ワークショップの開催中に小さな課題を与えられたりします。このワークショップのコンセプトは、広く言えばアメリカのシステムを引き継いだものといえますが、具体的に言うと、修士や博士すべての大学院生にきちんとしたプログラムを与えるというものです。もちろん、修士課程にとっては完全なプログラムであり、博士課程にとってはそれが部分的なプログラムとなっています。というのも、たいてい博士課程の学生は、(プログラムの一方で)自分たちの研究を始めているからです。ただ、どの学年の院生に対しても、きちんとしたコースプログラムがあります。彼らは、試験にパスしたり、レポートを提出したり、そのための準備をいろいろとしなければいけないのです。

大学院教育には、2つの段階があります。まずは、1年間の修士(文系・理系)です。学生たちは、12の専門分野から自分の進むべき道を選びます。そして、さらに上級の学生はRMAに進むことが許されます。これは2年課程で、4つの選択肢があります。

12の専門分野をちょっとここでお見せします。2

年前までは、修士ではこの12の分野のうち1つしか修めることができませんでした。しかし、2年前からはプログラムを変更し、2つの分野を専攻できるようになりました。ちょっと見てみましょう。

例えば、2年前だったら、アジアの考古学の修士を取ることができました。しかし今では、考古学で修士号を取るためには、アジアの考古学にプラスして中央アメリカの考古学を修めなければならないのです。つまり、修士号に2つの分野がついてくるのです。

**司会者:** それでも1年課程のままなのですか?

**ビントリフ:** そうです。1年です。では、この1年修士課程の構造を見てみましょう。まず、全学生必修のコースがあります。理論コースには、すべての修士院生が参加する「上級理論と方法論」というコースがあります。そしてもちろん、各学生は学位論文を書かなければいけません。これは本当に大変です。見ての通り、プログラムの合計は60単位となりますが、このうち学位論文だけで3分の1を占めます。このように、全学生が受講する理論コースというのがあります。15単位の専門1、同じく15単位の専門2の2つを選択することができます。大まかに分けましたが、これが通常の3つのコースです。さらに、自分の興味のあるところから全く自由に1つを選択することができます。

例えばこんな風です。各学生はまず理論コースを選択しなければいけません。そして学位論文は、その学生の専門分野にかかわるものとなります。そして残りの3つのコースは、「アジア考古学」ともう1つ何か。「サイエンス」かもしれないし、「旧石器考古学」かも



しれない。そしてもう1つ、どんなものでもいいので選択できます。その学生が興味を持つものであればどんなものでもかまいません。役に立つと思えば、「コンピュータ」でも「動物骨」でも、重箱の隅をつついたような分野でもいいのです。

さて、よろしければ次にRMAに話を進めましょう。実はここに進むには、学部で良い成績を取っておく必要があるのです。学士の成績で7.5、卒業論文で8の成績が必要です。オランダでは、修士に進学するためには、学士を卒業する際に最低60%の成績を取ることが必要となります。修士の成績は学士の成績の最低点とほぼ同じと考えてよく、もし学士が取れるなら修士は取れたも同然だといえます。それだけでなく、政府からの助成金も手に入れることができます。オランダでは、学部入学の際にすべての学生が政府の援助を受けます。そして学士号を得ると、今度は修士課程に入る権利を得ます。そのために60%という成績が必要なのです。60点取れば学士号を得て修士に入れます。もしRMAに入りたければ、さらに高得点、75%とか80%の成績を取らなければなりません。だからRMAプログラムには、高い壁があるのです。(通常の)修士プログラムには壁はありません。誰にでもできます。政府はMAのために1年間の給付を行います。上級コース(RMA)なら2年です。さらに上級の教育を目指す人にはさらに奨励金があります。MAを目指すのは簡単ですが、多くの学生は学士の後に何をするのかよくわかっていません。MAの後も同じです。それなのに政府がお金を与えていることについて、このシステムに批判もあります。必ずしも強い動機を持ってMAにいるわけでもない、単に友達と大学で過ごしたいだけ、そんな学生が大学にさらに1年いるなんて！

当然、RMAにはより賢明な学生が在籍していますから、より動機づけも高く、彼らは本当にまじめに勉学に励んでいます。つまり、それだからこそ、このようなプログラムの違いが存在するのです。より難しいプログラムの方には、より高い成績を持って入学しなければいけないというわけです。しかし、このことが2つの事柄を引き起こしています。1つは、MAはそんなに期待できる代物ではないということ。もう1つは、MAに難しいコースを開講できないということ。なぜならば、もし最低点を取った学生がMAに進学してしまったとしたら、MAがより進んだプログラムを提供したら彼らは落第してしまうからです。

問題は、BAとMAの2つの教育のレベルを引き上

げられないところにあるのです。BAからの継続の問題で、60%の成績のBAがMAをとれるようにしなければいけないというところにあります。私が若かったころの英国での経験ですが、MAに入学するためにはすでにこのレベルに達していなければなりません。ですので、ごくわずかな学生だけが院生レベルの研究を続けることができたのです。質を保つためのバリアがあるのです。ですから当然より高度なコースを開くことができます。しかし、低成績の学生の入学を許せば、彼らが理解できる程度のコースを準備するしかありません。非常に簡単なものでなければならなくなり、彼らに高度な研究を期待できなくなるというわけです。

## ボローニャ・プロセスとオランダの対応

このように、オランダでは本当に賢い学生には「どうか上級のコースに行ってください、MAはあなたたちには簡単すぎます」と言わなければならない事態が生じてしまっています。本当に良い学生で勉強も一生懸命にするという学生には上級コースを奨めなければ、その学生の知性を本当に活用することができない、なぜならMAのコースはかなり低いレベルに抑えておかなければいけないからです。実際、この話の背景には政治的なものがあり、それは、ヨーロッパ社会がボローニャ・プロセスと呼ばれる合意をしていることと関係します。これは、ヨーロッパのすべての国々が同一の学位授与構造を持つことで、学生がヨーロッパ内の各国で流動的になることを促進するものです。

この考え方は、学生の流動性を促進します。ヨーロッパ社会は、例えばイタリアの学生がマルタで学んだり、英国の学生がルーマニアで学んだりすることを認めたいと思っていました。古いシステムでは、それは不可能でした。なぜなら、各国がそれぞれの教育システムを持っていたので、例えば3年生の時に(別の大学に)移動して(別のプログラムを)スタートさせることは不可能だったのです。それでEUは、EU加盟各国が同じ教育構造を持つことをボローニャで合意したのです。たとえば古典考古学では、2年生の時にドイツからフランスへ行ったとしても、すぐに2年生のコースを始めることができます。それは、日本でもさほど難しいことではないでしょう。

このシステムはBAMAシステムと呼ばれていますが、3年間の学部課程と1~2年間の修士課程があり

ます。そして、各学年の教育は各国ともに類似しています。なので学生たちはコース中に他の大学へ移ることができますし、1学期、もしくは1年間を別の国で過ごすことができます。まあ、オランダ政府はこのアイデアをあまり好ましいものと思っていなかった。実際、学部には4年間必要だと思っていました。ドイツだって、学部が3年間なのは短かすぎると考えていました。そこでオランダは非常に典型的な行動をとりました。口では合意にイエスと言っておきながら、行動ではノーとしたのです。つまり、口では、はいオーケーと言っておきながら、学部は4年課程を続けたのです。ヨーロッパルールにのっとって学部は3年間にしましたよ、でもさらに1年間MAをやりますよ、という具合に。しかし、それでは実際のところは4年課程ですよ。というのも、学生は全てBAからMAへ自動的に進学できるのですから。そうやって4年課程を続けることから、MAの勉強にはバリアがなくなってしまったというわけなのです。

基本的に、オランダでは4年課程を続け、その最終学年をMAと呼んでいるわけですが、このMAには資格といった意味はありません。上級の修士課程ではないのです。なぜなら誰でも取れますから。つまり、実際には4年間の学部課程はずっと続いていて、名前が変わったというだけの話なのです。これは教育にとって良いことではありませんし重要なことでもありません。本当はMAというものは、より高いレベルの大学院課程のことだからです。実際、どんなコースを取得したかで学生は区別されます。そこに選抜ということがあるのです。より高度な教育がここにはあるべきなのです。ところが現実には、MAがBAの学年の1つであって、そんなに高度なレベルじゃなくて、実はある種の政治的な形態となっているのです。そういうわけで、我々にとって、MAを上級プログラムとして教えていくのは困難なのです。

## MAの実態

それでは、そのMAコースとは一体なんでしょう？ そこに12の専門分野を示していますが、MAの学生は2つを選択しなければなりません。一般コースをまず取って、それから2つの選択科目を取るわけです。これはそのうちの1つ、北西ヨーロッパ先史です。3コースあります。こちらは旧石器時代です。たいてい、主となるコースとセミナーがあり、そこで学生たちは発表しなければなりません。こちらは古生態

学です。これはより科学的な学問です。物質文化、岩石学、土器学などもあります。これはMAプログラムの古典考古学です。歴史と考古学が混じったものや、より基本的な考古学の家屋に関するもの、美術史的なコースなどがあります。これらさまざまなアプローチを交えて授業をすることができます。こちらは近世東洋史です。古代と近世の東洋史の授業があり、通常隔週でゲストスピーカーを招いてセミナーを開いています。

こちらはエジプト学のMAで、非常に幅広い学問です。私のPhDの指導生である白井則行氏によって教えられています。これは、主流である青銅器時代のエジプトで、ローマ・ヘレニズム時代のエジプトもあります。もう1人、アジア考古学を教えている同僚でIlona Bauschさんという同僚がいます。彼女は京都で同僚たちと研究を続けています。これはとても興味深いコースで、博物館学が混じったものです。この学問はオランダではもちろんとても充実した学問で、数多くの歴史的な素材や言語学、美術史、一般考古学などの歴史の講義を含んだ分野です。ほかにも南アメリカ、中央アメリカの選択科目や、カリブ海のグループ、全般的な世界遺産のコース、そして、野外調査、これは主にオランダの考古学について行います。というのも、かなり多くの学生がオランダ国立の考古学機関で仕事につきたいと考えているからです。彼らは、オランダ本国で実際に仕事をするための方法を学び、国立の考古学機関で働くための資格を得たいと思っているのです。

次ですが、我々は学生に論文執筆も課しています。MA課程の3分の1がこの学位論文になるわけですが、ブラックボードとよばれる教育用ソフトウェアをよく使用します。学生たちは、コースに関する情報をウェブを通して入手し、レポートや論文もウェブを通して提出し、採点もウェブ上で行うことができます。ブラックボードには教師と学生双方が利用できるたくさんマテリアルがあります。

論文執筆には、1～2名の指導教員がつきます。評価は2名で行い、1人は指導教員、もう1人は考古学の別の分野からとなります。そして、試験委員会が、2名の評価者による評価が満足できるものであるかどうかチェックをします。論文の採点理由の説明にはかなりの長文を記述しなければなりません。発表の仕方、論理の組み立て、参考文献の引用方法、図の利用、議論の部分、などについて、20項目ほどの質問に答えなければなりません。採点するに当たっては、

本当にさまざまな点にわたって明確にしておかなければいけないのです。時には、ここまで念入りにする必要があるのであるのかな、とも思いますが、ともかく、質問項目にチェックし、同じ質問に答えないと終わらないわけです。こんな複雑な評価用紙に答えていくことが有効であるとばかりは言えません。採点対象となる学生を個人的に良く知っている場合ばかりとは限らないからです。

この採点方法のもう1つの問題は、2年前からの新システムにあるのですが、1～2名の指導教員をつけて、採点は1名が指導教員でもう1名は考古学からとはいえ別の分野からの教員というところにあります。これは私の意見ですが、非常に問題が多いと思います。たとえば、今年私はインドネシアに関する論文の第2試験官でしたが、私はインドネシアについてほとんど全く知識がありません。つまり私は、素人試験官も同然だったわけです。こういう試験を行う背景には、より客観的な試験をするべきだという論理があります。なぜなら、もしその2人の指導教員がそのまま採点者だとしたら、2人とも古典考古学の学生にはとても好意的になるだろうし、そうすると古典考古学の学生は皆、高得点になってしまうでしょう。逆に、アメリカ考古学の学生に対してとても厳しく、全員が低得点になってしまうでしょう。

なので、よりバランスのとれた採点をしようとしているのです。それで専門外の教員に論文を読ませ、意見を尋ねているのです。しかし問題もあります。その分野について全く知識のない人が、これは良い論文ですなどと本当に言うことができるのでしょうか？ 学生は本を丸々コピーしてきているかもしれませんが、素晴らしい研究を全く独自に行ってきたのかもしれませんが。私にはそのどちらかを見分けることが全くできないのです。ですから、これは悪いシステムだと思います。もちろん試験官が客観的であるようにすべきですが、無知な人間を連れてくることは、さらに悪い結果になると私は思います。ですので、実際私はこのシステムからちょっと外れたようなことをしています。たとえば、インドネシアの論文の採点を担当するといった場合は、その学生の指導教員のところへ採点用紙を持って行き、どういう採点が良いのか、鉛筆でこっそり該当箇所にチェックを頂いてくるのです。

それから学生たちには、その考えが本からの借り物なのか本人の独自の調査に基づくものなのかを尋ねます。学生たちの研究は非常に意味のあるものもあれば、ひどいものもあります。そこでようやく私はその

研究についてわずかばかりを理解するのです。もし私が何か疑問を抱いていたり、これは本当によい研究なのかどうか確かでないかという場合には、専門家がその研究に対してどう思っているかを知ることは大変重要なのです。ですから私は、まず指導教員からアドバイスをもらうことで、自分の判断により注意を払うことができるのです。

次に行きます。これはMAの学位論文のための予定表です。ほとんどの場合9月に始まって6月までには終わらなければいけません。年度が半分過ぎたところでやってくる学生もいますが、そのことについては触れません。教科の選択、基礎的な準備、問題意識の方向付け、最初の草稿は5月までに完成させます。そして6月に指導教員と相談して最終草稿を仕上げます。ここでは非常に複雑な流れとなっております。大変良く見えると思いますが、このシステムには欠陥があります。それは、オランダという国が非常に民主的な国家であるということと関係しています。というのも学生には常に2度目のチャンスがあるのです。失敗しても、もう一度その研究に携わることができるのです。ですから、実際のところ締切という概念はないのです。

例えばここでは、5月1日に最初の草稿ができ、6月15日に最後の草稿が提出されるというプログラムが示されています。ほとんどの学生はそのようにできません。これは実際のプログラムとは言えないのです。教員は学生たちに最初の草稿を5月1日までに出示してくださいと言いますが、実際には何も提出されません。このシステムが機能するためのきちんとしたメカニズムが何もないからです。もし学生が「まだ論文を書いているところです、準備が整いません、もうちょっと時間が必要です」といえばOKで、彼らはそれを続けることができます。それに対処する方法は何も



ないので。なので、1年後になってもまだ同じ学生に「最初の草稿を出しなさい」という場合もあります。いつかは草稿を持ってくるでしょうというわけです。これでは無規制も同然です。

英国では、MAは1年で、論文提出も6月15日です。もしそれまでに提出されなければ落第で、MAの学位は取得できません。実際、95%の学生は6月15日には論文を提出しています。でもオランダでは誰も提出しないのです。ですからこれは想像上の予定表なのです。本当に、その日には何も起こらないんですよ。ごくわずかな学生しか、いや、どの学生もまったく提出しませんね。だって学生たちは、何もしなくても何も結果を出されないということを学習してしまっていますから。だから学生たちはずっと学生のままで、私はより一層の時間をかけて仕事に邁進しています。本当は休暇を取りたいのですが。まあ、これからも私の身には何も起こらないでしょうね（つまり学生は論文を提出しないでしょうね）。本当に、ほとんどの学生は1年では修了しないのだから、これはとても悪いシステムなんです。講義の単位は取っても、学位論文は修了しないのです。

1年後に彼らは学校を離れてどこかで暮らし、留学生は例えばカナダなど自分の国に戻ると。それで「論文はどうなっていますか」と教員から手紙を書くとしますね。すると、「大丈夫です。準備はできていませんが、1年後には。本当に大丈夫です、まだできていませんが」という返事が来るわけです。これは私にしてみたら本当に悪いシステムですよ、だって締切のないシステムなんだから。もし万が一締切があったとしたら、学生たちにすぐにでも「締切がつくようになりましたよ」と言ってあげることができたら、こんな問題は解決するのです。それも現実的な日付ですよ。論文なしにはMAが取得できずに落第ということになれば、学生たちはすぐにでも変わることができるのです。

しかし、何も起こらないということがわかっていれば、彼らは何もしないのです。だから、この点がこのシステムの弱点だと私は思います。これはどのコースでも同じことです。たとえば、来週中にはレポートを出しなさいと言ったとします。さてその来週が来ます。学生に「レポートはどこ？」と尋ねます。非常に優秀な学生ならレポートを持ってきますが、それ以外の者は何もしません。何が起こるかって？ 何もです。1年後、ようやく彼らがレポートを提出したとします。それでも教員は成績を与えるのです。これは本

当に学生にとっても悪いシステム、悪い規則と言えます。もちろん、学生の多くはほかにもいろいろと問題を抱えています。仕事に就いたり、さまざまな出来事が起きたりもしています。これ以上本を買うことができなくなったり、コースを終えることが難しいと思うようになってたりもします。でも、たくさん時間を与えることは、そんなに学生のためになるとは思えません。

教員にとっても、非常にイライラします。20人の学生のうち5人がコースを修了するとして、残りは、1か月、2か月、1年、2年と続け、最後にはどこかへ行ってしまうのです。悪い意味で民主的なことなんでしょうけど、学生たちには、もっと時間をかける、2回チャレンジする、あるいは1回で終わるという選択肢が与えられているのです。でも、これは決して良い教育とは言えません。

さて、次は盗用防止について、昨年から現在までのことについて、もう1つお話することがあります。盗用というのは、既発表の業績から何かを引用してきて、しかもそのことを明らかにしないことを言います。原典が正確にわからないという場合などです。時間を節約するために意図的にやったとか、情報源を書かなかったとか、そういうのは形式上「盗用」と呼ばれています。これは、論文やレポートを書く際に利用したソフトウェア上にも起こりますし、誰か他人の本を引用した場合のその文章や、ウェブやウィキペディアなどから素材をコピーしてくるときにも起こります。論文に原典を引用することなく載せてしまえば、起こってしまうのです。そこで我々は、学生たちがSafeAssignと呼ばれるシステムを使用していることを示さなければいけないという制度にしています。これは、公開されている原典から無断で情報を引用していないというチェックを受けたことを証明するシステムです。

次に、どうやってプログラムを評価するかについてですが、学生たちには研究アドバイザーがいます。学生たちが代表者を選出し、プログラムがうまく機能しているかどうかを話し合う委員会もあります。すべての学生は、ブラックボードと呼ばれるソフトウェアの使用登録をしなければいけません。このシステムはデジタルです。院生のためのニュースレターもあるので、講義やプログラムの変更などの新しい情報を入手することもできます。

## RMA の制度

先ほど申し上げましたが、成績も動機づけも高く、おそらく PhD や学術的な研究を目指している学生は、RMA に行くことを勧められるでしょう。我々にとって幸運なことに、ここに質的なバリアがあるのです。だから、成績の良い学生だけが RMA に上げられるのです。かといってそれほど高い成績ではなく、75%ほどです。通常の教育の言葉で言えば、正規分布という話になります。非常に高得点をする者は少数です。たいていの学生は真ん中にいて非常に低い得点の者もまた少数です。これはガウス分布の形をとっています。実際、この形状の真ん中部分は75%です。非常に高いですが、とにかく75%です。

この上級コースでさえ、成績が突出している必要はありません。トップの学生を取っていないのです。より成績の悪い学生が MA を取れてしまうことの反映なのかもしれません。だから、成績の悪い学生ではない普通の学生がいます。普通の成績を取っていれば上級コースに進めるのです。こういったことも問題を引き起こしている原因となるのではないか、と思われるかもしれません。なぜなら、上級コースはとて高い能力をもった本当にやりがいを感じている学生のためのもので、独自の思考が必要であり、1人でたくさんの研究を遂行するべきものではありませんか？ でも実際には、普通の学生にとってそれは荷が重すぎます。なので、上級コースへの進学システムもうまく機能していません。多くの学生は、上級コースでの課題に困難を感じています。MA だったら、我々もあまり高レベルのコースを認めていません。なぜなら BA プログラムの一部ととらえているからです。しかし RMA では、より学生個人の専門に合うコースを展開しなければいけません。学生たちも自分自身の研究を進めなければいけませんし、そうなると多くの学生は自立した研究者となることの難しさがわかるのです。

RMA のバリアはまだちょっと低すぎます。それは、このコースがそれほど高レベルになりきれていないことを意味しています。しかしこのプログラムでは、PhD を取得しようという非常に賢い学生も集まっています。ただし、普通の学生とトップレベルの学生との間に微妙な軋轢はあります。たとえば課題を与えると学生は図書館へ行きます。ある者は非常にオリジナルな、しかもとても質の高いレポートをまとめます。しかし別の学生は、ただ単に図書館へ行行って本からいくつかの情報を拾い、コピペしてレポートをまとめま

す。オリジナリティもなければ自分の意見もありません。ただ単に本にあることしか書いてないのです。非常に賢明な学生は、その課題から新たなことを考え始め、教員に新しい知見を与えてくれることもあります。同じクラスの中でそういう2つのグループがあるのです。彼らを教えることは難しいです。なぜなら、できの悪い学生を落とすこともできなければ、こんな研究では満足がいけないということもできないからです。その代り、こう言うしかありません。「この研究はいいね、だって君はこのコースに進学することを認められたのだから、君は良い成績をつけられて当然だ、君の成績は平均以上だから」って。

つまり、教員はあまり批判的であってはいけないのです。あまり多くのことを学生に要求してもいけないのです。繰り返して言いますが、このコースは非常に大きな問題を抱えています。なぜなら現状の教育システムでは、もしあまり多くの学生を落第にした場合、大学当局からこれは悪いコースだと言及されてしまうからです。学生にとっても難しすぎるコースは不幸ですから、教員は徐々に落第点をつけた学生からの不満を受けるようになります。しかし、教員にとっては全員を合格確実にすることもプレッシャーとなります。しかし、全員合格と言うことでなければ、(逆に教員の側が)ネガティブフィードバックと(評価)されてしまいます。そう、ほかのコースより簡単なコースがメディア研究の分野にあったのですが、すべての学生が今年は100点満点だったという話も聞きました。たとえば10%の学生が落第したコースでは、何かプログラムの方に欠陥があると考えられてしまうのです。これではやりきれません。

さらにオランダでは、学位を取得した学生の数によって交付金が得られます。それが大学の収入になるため、学生を落とすことができません。つまり学位と引き換えにお金を得ているのです。すべての学生を通すことはプレッシャーですから、コースをあまり難しくすることができないのです。このような教育基準には多くの問題があると私は思います。学生の学力水準は決して高くありません。かりに非常に賢い学生がいたとしても、その才能を真に使う機会はそう多くはないと言えます。

RMA は2年課程で、より興味深いコースについて2年以上在籍することも可能です。その際に4つのオプションがありますが、ここでは1つだけ取り上げて詳しく見てみましょう。たとえば「人間の起源」は基本的に旧石器時代であり、「前史農耕社会」は新石器

時代及び青銅器・鉄器時代、「都市及び国家」は、古代地中海及び西アジアのもので、これは、古典考古学と西アジア考古学とを組み合わせたものであり、ネイティブアメリカンと言えば、カリブ海と中央アメリカの話になります。ほかにも2年以上にわたるコースがあります。

では次に、RMAではどんな課題があるかを見てみましょう。1年生で2つのコースがあります。各学生は、もう一度上級理論コースを取ります。それから隔週でセミナーがあり、1年に2回ワークショップがあります。これは院生すべての一般教育です。1年生では、専門教科で5つのコースがあります。1年生のうち論文のための単位を取得してしまいます。さらに2つのコースを自由選択できます。興味があるもの、自分にとって役立つものを選びます。そして2年生で、全員共通のコースを取ります。これは非常に上級者のコースですが、どのように知識を身につけたり知識を評価したりするのかに関する「認識論」や、特に研究を続けてPhDを取りたいと思う学生にとって役立つ「科学的方法」に関する授業です。すべての院生に課せられているセミナーやワークショップにも参加します。それから、自分の専門の中からほかに4コースとります。これは自分の論文とより多く関わりのあるものです。それ以外にさらに好んで2コース選択します。

このRMAコースがあることは、まず、教員にとって良いことです。というのも、学生を選抜することができるからです。BAの中でもよい成績の者だけが進学できるので、この修士課程はより上級のコースと言えるでしょう。本当に上級の、ハイレベルのコースだと思いますが、本来修士課程はそうであるべきなのです。もっと複雑であるべきなのです。ですから、この点はRMAの良いところですね。おそらく真の修士課程とは、こうあるべきなのでしょうね。2年課程ですから、学生には知識を深める時間もより多くあります。1年では短かすぎますし、1年で論文を仕上げるのは難しすぎます。特に、通常の学士課程を修了して来るアメリカ人学生の場合、中国語、バスケットボールなど、200ものさまざまな単位を取ってきます。でも、ここで古典考古学のMAを取得しようとしても、たった1年で何も知らないところから学習して、論文を書かなければならないのです。

1年の終わりには少しばかりの知識を取得して、それでも論文を書かなければならない。ちょっとこれは性急すぎます。たった1年で何かを学んで、それで

同時に特別な論文も準備しなければいけない。これは課題が多すぎます。それに対して、RMAでは2年ありますから、バックグラウンドのない学生でも知識を深めるのに余裕があります。ましてや、より優秀な学生であれば学習の進度も速いです。たとえば、アメリカから文化人類学の学生が来て、2年間で古典考古学を学ぶとします。優秀な学生であれば非常によく知識を吸収し、オリジナリティのある優れた論文を書くことができるでしょう。なので、RMAは良いプログラムだと思います。もちろん、たった1つのトピックを学ぶのであればそういうことも可能です。しかし、アジア考古学、地中海に西アジア、と学んだのであればどうでしょう。これは非常にばらばらな選択ですね。ある分野に集中した教育とは言えませんが、2年間で本当にになにか1つの専門家になるとするのなら、これは良いプログラムだということができます。

理論や認識論に関する共通科目もたくさんあります。だからこそ学生は研究、科学、あるいは知識の本質といったことを理解するのです。また、グループ活動や講演、ワークショップなどもたくさんあります。学生たちは聞いて意見を述べたり、あるいはグループに寄与するような活動をしなければなりません。もちろん、学生たちにもいくらかの自由がありますから、そこで語学を学んだりすることもできます。たとえば中央アメリカで働きたい学生であれば、スペイン語が必要になります。そういう学生のために語学学習の機会もあります。GIS（地理情報システム）を扱うためにコンピュータ技術を身につけたいというのであれば、技術的な部分を習得しようとすることもできます。もっと動物骨、植物遺存体、考古学について知りたいと思うのであれば、それについても特別な実習を受けることができますし、知識を得ることもできますから、1年課程と比べるとこのRMAは良いと思います。

このシステムに関しては話すべきことがたくさんありますが、おかげさまでこういう機会を頂き、このシステムが大学院生にとってどのような意味を持つのか、実際どんなことが起きているのか、どんな授業を行っているのかについて、考えることができました。とりあえず、ここまでにしましょうか。

## 博士課程の教育システム

司会者：ありがとうございます。只今、ピントリフ教授より、オランダの大学院のシステムにつきまして



たくさんのお話をしていただきました。私たちのプログラムと似ているなど思ったものもありましたし、全然違うと思うものもありました。

**ビントリフ**：そうですね。少しお聞きしたいのですが、日本の修士課程は1年ですか、2年ですか？

**司会者**：2年です。

**ビントリフ**：皆さんそちらに進まれるのですか、それともほかに選択があるのですか？

**司会者**：選択と言えば、ありますね。

**ビントリフ**：わかりました。じゃあ、修士に進むためにはどのくらいの成績を取る必要がありますか？典型的な表現方法として正規分布がありますが、それでいうと高得点に当たるのか中くらいの成績が必要なのか、それともちょっと高めといった程度なのですか？建前上は、といった感じですが。

**司会者**：ちょっと言いにくいのですが。というのも、ここには私の教え子の院生たちがいるものだから。

**ビントリフ**：この方たちはきっと正規分布のトップにいる人たちだと思いますよ。

**司会者**：とにかく建前上は、トップの学生なら修士の入試をパスして大学院に入学します。彼らの中でもより才能のある学生が、さらに博士後期課程に合格します。2年の修士と3年の博士があります。ですので、大学院のトータルの期間は5年です。ただし実際には、ほとんどの学生が5年以内に博士論文を完成させることができません。これは私たちにとって深刻な問題です。そこで、我々教員誰もがあなたに尋ねてみたいと思っていることがあるのですが、それはPhDの学生の進路についてです。どうやって常勤職を得ていくか、ということです。

**ビントリフ**：そうですね、まず、オランダではPhDは4年あります。そのうち、たいてい最初の3年間に對し助成金があります。最後の1年は論文を書き上げる年度となります。一般的な感覚からいえば、4年というのがより現実的だと思います。なぜならば、通常1年目に基礎を積み上げ、2年目に調査を行います。これは学生のオリジナルな調査ですから、しばしば3年目も調査を継続します。そして、論文を書き上げるのに丸1年必要です。ですから、通常4年必要だと思います。しかし、かなり多くの学生は、4年で何とかやっとなら書き上げるといった感じ。毎年のこういった状況に手を差し伸べるために論文の審査委員会があります。ここには指導教員は含まれていません。

学生は、指導教員の含まれていない委員会に対して、論文の進捗状況に関するレポートを提出しなければなりません。そのレポートには指導教員からのコメントが付けられます。そして、論文の章立ても提出しなければいけません。これは大変重要なことです。第1章何々、第2章何々、といったように、現在検討中の章立てについて報告するのです。これこそが「研究が順調に進んでいますよ、この学生は良い学生で一生懸命励んでいますよ」という指導教員の唯一のお墨付きとなるからです。

審査委員は、第1章は何で、第2章は何で、第3章は何ですか、と言ったことを聞いてくるわけですが、最初の1年で2つの章を示さなければなりません。第1章は先行研究について、つまりその研究の既存知識の部分です。第2章は、学生自身の方法論、アプローチ、学生がどのようにその研究をするか、ということです。ですので、第1学年でこれら2つの章を書き上げて、委員会に示す必要があるのです。PhDの1年生ですでに問題提起はなされており、それを遂行していくことに対する大きなプレッシャーもあることですから、こういうことはとても良いことだと思います。それにももちろん、1年の終わりまでにアプローチの部分が書かれていなかったとしたら、なにをすべきかわからないというわけですから、それ以降の研究についてスムーズに進めることができないでしょう。だって、2年生には調査しなければいけないのですから、今後何をしていくのかという部分すら仕上がっていないとしたら、いったいどうやって調査したらいいんでしょうか。だからこういうこと、つまり1年生で2章までを書き、それを指導教員とは独立の委員会に提出するというのは良い方法だと思います。指導教員と学生が良い関係であれば、教員は「彼は良い学生ですよ、一生懸命やっていますよ」と言うからです。

さて、委員会がOKを出すときは、その研究に興味があるのではなくて、第1章と第2章を見て、それが正しいということの意味。たとえば、学生と良い関係を保っている指導教員だと学生を粗雑に扱えなくて、「怠け者だけど本当はいい子で」と言ったりします。一生懸命やっていないことに対して否定的なことを言えなくなってしまいます。でも委員会なら、その学生がいい子かどうかなんて関係ありません。単に報告書を読むだけです。ですから、学生にとってはとてもきついなと言えましょう。しかし、4年で書くというのは現実的だと思います。実際は毎年似たような審査があって、委員会のチェックを受けます。2年次

には3・4章を書き、委員会に提出します。問題があれば、委員会から指導教員に「なにが起きたのか、この研究はどうなっているのか、きちんと指導しているのか」という問い合わせが行きます。

なので、このシステムには良いフィードバックがありますし、結果としてほとんどの学生は4年以下で論文を書き上げています。もちろん、家族の問題や病気などについての理解は必要です。たとえば、エジプトのような外国で1年研究するような場合は、エジプト政府は就学許可証をくれませんから、石切り場のようところで現地調査を行うにしても、その年には何も研究成果を残せません。こういった場合もあるということを確認した上で、4年というのは妥当であると思います。もう1つ重要なことですが、旧システムでは研究をやめるタイミングがわかりませんでした。4年のPhDというのは、有期限プロジェクトと言えます。PhDに在籍しているということは、あるレベルのところにいると言うだけにすぎず、常に新しい可能性に出会うことができるところにいる、ということです。あれもしたい、もっとたくさんのデータも集めたい、と思うのは、非常に楽しいことです。

PhDの学生の多くは、ポスドク的な研究をしています。すでに次のレベルに移行しているのです。彼らには必要とされる以上の研究をこなしています。だから、学生たちにも説明しなければいけないのですが、それは、PhDを取得するためにしなければならないことなんてこれくらいでいいのだよ、ということです。それを君たちはもうやっている、これ以上のことは、君たちが学位取得後に研究者としてやっていくべきことだと言わなければいけないのです。この程度でもう十分です。学生たちは、遺跡へ行ったらさらにデータを集めてもらえるし、新しい研究アプローチもわかっている。だから、待ったをかけなければいけない。なぜなら、4年あればかなりのことができるからです。試験官もPhDを取得するのに十分なものは一体何なのかについて、もっと限定して考えた方がいいでしょう。かつては6～10年も学生を在籍させておいて、それで学生たちは、突然こんなに大きな5巻もあるような本論文を書いてやってくる。それでも誰ももうやめなさいなんて言わなかった。今では字数制限があって助かっています。10万語以内です。もし10万語以上書きたければ、試験委員会に理由書を提出しなければなりません。文献目録がたくさんあったとしても、それが単なる教科書的なものだったとしたら、許可はおりません。

指導教員が彼らの研究を理解することは本当に大切なことですが、かつての指導教員にとって大変だったことは、学生たちが40万語もの論文を書いてくることでした。彼らの頭の中では、PhDというのはそれほどにも大きな存在だったのです。現在の指導教員は、新しくPhDを取ろうとする学生には、もっと小さな論文を書くように言わなければなりません。もっと小さく考えて、4年間で考えなければいけない、4年で書き上げなければいけないんだと。ですから、学生がこれ以上研究をするのを止めてあげるのです。「それ以上やらないで、もう君はそれができるんだから後回しにしなさい」とね。ちょっとそこから頭を離して、ポスドクになってから考えなさい、と言うのです。

そんなことを言う一番の理由は、彼らがこれで十分だとは考えてないからです。でも、学生たちが世界中のあらゆる問題を解決する必要はない。アインシュタインである必要もない。「それだけやれば十分だよ、PhDを取るにはね」というわけです。本当に、そんなにしなくていい。放っとけばいいのです。でも放っておくというのは本当に難しいというのもわかります。なぜならば、私たち自身は若い頃に無期限のPhDの訓練を受けてきたわけで、誰も私たちに、十分だよ、やりすぎだよなんて教えてくれなかったからです。私たちの指導教員は、「最後まで続ける。論文を持って来い。そうしたらどれくらいの出来か言ってみよう」と言うばかりでしたから。

しかし現在は、6つ集めたら3つだけ出せばいい、と言わなければいけません。データを集めてしまったらそれは放っておいて、あとで見直せばいいのです。4年間という期限内に実行可能であることを考えるのは、とても大切なことだからです。英国では、経済的な観点から、2年課程、もしくはもっと短期間のPhDを検討しているようです。第一、政府がお金を払いたがらなくなっています。それに、学生たちも助成金を得ていません。自分で学費を払わなければならないのです。それで、学生ローンでお金を借り、巨額の累積債務を抱えていたりするのです。おそらく、30～35年たってもその借金を返し終えることはないでしょう。これは非常によくはない状況です。そこで、BAは2年、PhDももっと短く、という提言が出てくるのです。しかしこれは、BAがさらに教育不足になるということの意味しています。

## 専門の研究者に必要なこと

キャリアについてですが、PhDにはそれほど多くの助成金がありません。奨学金も多くありません。だからほとんどのPhDは、家族からや、たいていはアルバイトをしてお金を得ています。そういったアルバイト仕事のために、研究が片手間になります。もちろん、そのことで在籍期間も長くなり、たいてい6年間ぐらいいます。その間、モチベーションを保ち続けなければなりません。ごく少数のPhDだけが奨学金を得ています。ほとんどは助成がなく、そういう意味では非常に差別的ではあります。非常に熱心な学生だけがPhDを取得します。そういう学生なら、自分で自分に学費を払おうという気になるからです。では、なぜ学生たちはPhDを取ろうとするのか？ 科学の分野では、その方が就職によいからです。

生物や医学のような分野なら学位取得後の職場を考えやすいのですが、古典や古典考古学などの場合、おもな就職先は大学や博物館のスタッフです。非常に限られたものしかありません。それに歴史学でも、その分野にとどまろうとしたら、やっぱり同じように限られた可能性しかないのです。学位を持った多くの学生が、自分の学位上の専門とは異なる職場を選択するような事態があることを、教員たちも心にとどめておく必要があります。さらに言いますが、学生たちは、専門と異なる仕事をするための訓練を受けているのでしょうか？ そもそも大学院というところは、博士課程のためのトレーニングの機会を学生たちにより与えやすくするためにあるものですから、もちろん非常に専門化された学位論文を書かせるわけです。おそらく、こんな特定化された仕事はないでしょう。しかし、大学院ではほかにもコンピュータスキルや言語スキル、研究スキルを訓練しており、そういったいろいろなコースも取らなければいけません。ですから学生たちは、よりいろいろなことができるようになり、そのおかげで、他の職業を探すことも可能になるのです。通常PhDそのものは、特殊すぎて仕事には向きません。

通常、非常に人気の高いDNA研究のようなものを除いて、自分の持っているPhDを活かした仕事に就ける人はいません。たぶんDNA研究者やコンピュータ関係の人ならば、その技術を使った専門職に就くことができるでしょう。しかし、歴史学や考古学などの場合、通常は専門職と言ったら大学教授や公立の考古学研究所などしかありません。たとえば、考古学研究所に勤めたとします。確かにそこには考古学者とし

ての職がたくさんあります。ですが、学生たちが楽観的になりすぎることについては、少しばかり気を付けないといけません。「そうだね、考古学は非常に興味深い分野だよ、でも、最後まで勤め上げられるような仕事かどうかはわからないよ」という必要があります。

ただ、先ほど昼食の席でも申し上げたように、大切なことは、開かれたトピックを持つということなのです。ただ単にその分野を勉強していればいいというのではないのです。なぜならば、私は確かにこういう分野に興味を持っているわけですが、同時にそこで得られた知識を人生の他の側面の問題、社会学的な問題や生態学の問題などに応用できるのかといった、より大きな問題にひきつけようとしています。かりに私が、そうですね、エジプト中王国時代のマスタバ（王墓）の専門家だったとして、「私はマスタバに興味があります」と考古学の門外漢に言っても、その人からは「そんなこと何が面白いの？ そんなこと何の役に立つの？」という答えが返ってくるだけだと思います。でも、「そうだね、国の社会機能とか気候の変化なんかに興味があるんだ」と言えば、人は「それはおもしろい、今の時代にぴったりだね」と言うに違いありません。

明らかに過去の問題に非常に特定化されたPhDを取ることは良い考えだとは思いますが、それだけではなく、人々に向かって、なぜ皆にとってこの研究が重要なのかを説明できなくてははいけないと思います。そしてここにこそ、一般の現代人が興味深いと思っている問題の、2つ目の側面があります。つまり研究者は、人や組織、環境にかかわる環境学や生態学、経営、公的サービスなどに、自分自身の研究を引き付けて考えることができるのです。そういう基礎を持っているのです。中王国時代の王墓に基礎があるならば、エジプトのガイドをすることができる。ツアーを案内することができるし、大学の先生にもなれる。と言っても、それだけのことです。

学位を取ることは良いことだと思います。研究したいという熱意のある者を止めるつもりはありません。ドイツ文化やドイツの陶磁器についてでも語り合いませんか？ 話題はたくさんありますよ。ドイツの陶磁器は大好きです、本当に。誰かに「そうだね、でも、ドイツの陶磁器のことなんか調べて結局どうなるっていうの？」と言われるかもしれません。でも、ドイツ文化や文化人類学の知識から、社会がどのように働いているのかについて言えるとしたら、そういう社

会的な知識を必要とするもっと一般的な職業に就ける可能性もあります。私の場合、その後陶磁器に関する研究をずっと続けたのですが、先生にはOKを頂けなかったの、それ以来そちらの研究をやめました。6年間やりましたね。ちょっと悲しい思い出です。

ですから、学生たちが目を開いて大局的に物事を見るということは重要なことだと思います。誰かとパーティに行こうとして、自分は古代史学者なんだといったときに、「で、どんなことができるの?」と言われたらどうします? あなたは何か言わなきゃいけないだろうし、それに対して相手は、「それはおもしろいし重要だね」とは言うだろうけれど、「なんでそんな研究をして生きていくの?」とは言わない。これって

どういことでしょうか? あなたが「わからない。ただそれが面白いからだけ」と言ったとします。でも、あなたがもし天文考古学をやるんだとしたら、こうは言えませんか? 「火星から来た人々がピラミッドを作ったという説に興味があります」と。そしたら、人は、「それはおもしろい、本当かもしれないね」と言うかもしれません。でも、それが本当かどうかなんて、実はそんなに重要なことじゃなくて、ただあなたは本当に重要なことをやっていかなくちゃいけないし、PhDを取るためには、その分野に特定のことだけでなく、一般的な事柄に対しても何か述べなければならぬ、とそんな気がするのです。以上です。

## オランダの学生たち

**司会者:** どうぞ皆さんから、この機会に是非。イギリスやアメリカの話はよく聞きますが、こういう中間的な国の話はあんまり聞く機会がないので。

**Q:** この形式上の予定表は、とても興味深いですね。

**ピントリフ:** はい。

**Q:** オランダの学生は、一般に怠け者だと考えていいのでしょうか?

**ピントリフ:** はい (笑)。

**Q:** 研究者になろうとしている学生たちは違いますか? それとも、PhD取得を目指す学生たちも同じような兆候が見られるのでしょうか?

**ピントリフ:** そうですね、PhDの学生には2つのタイプがあります。1つは、とても聡明で知的な学生です。自分自身を研究へと駆り立てる動機づけが高いです。ある種の理想的な学生と言えるのですが、彼らが教員のところへ来るときには、「先生、もう新しい課題は終わってしまいました」のようなことを言いに来るわけです。教員の方は「ほう、それはすごいね」となるわけです。こちらでは、そんなことをしなさいなんて、学生たちに言った覚えはありません。ただ学生たちが自分自身でそれをやってくるのです。新しい考え、新しいアプローチ、彼らのもってきたレポートを読むのは本当にわくわくします。それは本当に彼らが自分からやってきたことなのです。ですから教員側の仕事と言えば、若干レポートを読んでやって、OKと言ったりいくつかアドバイスをしたりすることだけなのです。それで彼らは前に進んでいくのです。結

局、非常に優秀なPhDの場合、逆に教員の方が彼らが必要としているからです。なぜならば、彼らのおかげで時代についていくことができるし、そういう意味では学生から学んでいると言えるのです。PhDが修了するころには、教員も学生からいろんなことを学びます。もちろん、その中には間違っていることもあります。もし学生があなたを超えることがなければ、そこにその研究の限界があるのでしょうか。彼らは、最終的にはその分野の世界的な専門家にならなければいけません。それこそベストの学生と言えるでしょう。

すでにBAMAでこういった学生を目にすることがあります。論文を書く場合、平均的な学生には、2000語以上を書きなさいと言います。しかし、10000語以上の論文を持ってきた学生がいたとして、その中には、あなたが読んだことのない論文、聞いたことのない研究書が引用されているのを見つけたとしたら、あなただったらきっとそれをコピーして自分のファイルに置き、自分が講義をする際の参考にするでしょう。もちろん、それらの文献をととても興味深いと思い、読むべき本のリストの中に加えるでしょう。だから、こういった学生をすでにBAの中に見つけたとしたら、彼らを励ますでしょうね、「君なら本当にRMAに行くべきだよ」とね。もちろんPhDのことまで考えるだろうし、最終的にはそういう学生を指導することにもなるでしょうね。

今朝の講演でかなりたくさんのお話をしましたが、それは、こういった非常に優秀な学生たちの協力があって初めて実現したことです。彼らは今なお私とともに研究を進めており、出版もしています。本当に彼らあっての私であり、このようなことをとても幸

せに思っております。なぜならば、おかげでストレスが少なく済みますし、こういったことは君たちの業績だよと言ってあげることで彼らの評判を高めることもできます。ただし、非常に優秀で PhD を取りたいと思っている学生たちの中にも、他のオランダ人学生たちから、そんなに一生懸命やらなくても PhD なんか取れちゃうよということを学んでしまった学生もいます。そういう学生には、先ほど述べたように早い段階で待たせかけるよりは、もっとたくさんやりなさいと声をかけなければいけないと思っています。「まだ十分ではないよ。もっとやりなさい、もっと考えなさい」とね。

ですから、PhD を取れる潜在能力を持つ学生の中にも、モチベーションの高くない学生も何人かいます。たとえば、ライデン大学には非常に優れた大学図書館があります。しかし夕方にはほとんど学生がいません。これを知った時にはとても驚きました。トップを誇る研究を行う大学では、通常、昼夜を問わず研究者が研究を行っています。うちの PhD たちの研究は、9時～5時なんです。5時になるとうちに帰っちゃいます。平日ですよ。そういう仕事ぶりなんです。だから図書館に人がいない。もちろん家で仕事する人もいますが、なんていうのかな、大学では仕事、残りは自分の人生のために使う、という感覚なんです。まったく。研究室での時間は私のものじゃない、と。でも、本当にわくわくする PhD って、そんなものじゃないんです。わくわく研究している PhD ならば、家でも夜中過ぎまで研究します。私なら、何か新しいことを発見したいと思います。しかし、そうじゃない学生たちにしてみれば、今日の仕事が終わったから家に帰りましょう、となるわけです。おそらく、残り3年間を9時～5時で過ごすことで本の1冊なら書けるかもしれませんが、彼らにとって、それは全然わくわくするようなことではないのです。

まったくもって、こういった PhD の学生がその分野の研究を変えていくことはありません。確実な研究を行うという意味ではとても有効かもしれませんが。一緒に情報を収集し、2,3の批評をすることにもなるでしょうが、大躍進を遂げることはありません。だから私は、これらの学生たちが書いた本を読むということは、自分がしたいからと言って人に勧めたりはしません。「とっても素晴らしいよ」なんてね。みなさんに、「とてもいいよ、重要だから読んでくださいね」とはね。

こういう学生に論文を出版させるべきかについては

良く議論します。たぶんそうすべきではないでしょう。PhD といったって、誰も読む必要はない。良くはないんです。ただ学位を取るためだけに書いたものであり、そんな論文は刊行する価値がない。だって、本当に読む必要がないということこそが批判なのです。そのような学位論文の意味というのは、単にその学生たちが、読めてデータを集められてコメントできた、ということを示すだけのものだからです。

実際の研究者社会では、この手の本は本当に必要ありません。その分野を前進させてはしませんし、前進できなかったということは失敗だと私は思います。では、出版する価値がないのだとしたらどうしたらよかったのか。価値がないとしたら、その研究は本当は誤った研究だと言えるのではないのでしょうか。私は、出版する価値のあるオリジナルの部分こそが大切であると思いますし、それこそが PhD の定義だろうと思います。ケンブリッジで考えられている PhD の定義とは、オリジナルの研究で、出版する意義のあるもの、ということなのです。ですから私が思うに、オランダの PhD の多くは、博士の学位を取った、という程度の意味でしかないのです。それは大きな問題です。

## 教育システムの問題

Q：ビントリフ教授は、他のオランダの大学では優秀な教授陣を見つけられないのでは、と危惧しますか？ 講義をしても欲求不満になるし、オランダでは特に EU 内の他の国に行くことがありますよね。良い学者となれば、外での競争力もある。でも私が思うに、一般にオランダの大学は、新しい学者や学生を世界中から集めることが非常に難しいのではないですか？

ビントリフ：はい、そうです。良い学者がいたとしても孤立してしまう。切磋琢磨できるようなコミュニティに属することがない。なぜならば、動機づけが低く、そんなに良い業績を上げられないような学生たちに囲まれているからです。非常に個人的なモチベーションはあるのかもしれませんが、あなたの言うとおりに、学生に教えることで欲求不満が高まるのです。たとえば、時折私は講義内容をいろいろと修正します。翌年青銅器時代のギリシアについて講義をするといった場合、たくさんの論文や書物を読みます。でも、私がおこなったような講義をしたとしても、その年の授業と4年前の授業の違いに気づく学生なんて、クラスに1人いるかないかです。残りの学生は、4年前の授業内

容を繰り返し話したとしても全然関係ありません。同じようにハッピーなんです。

そのたった1人の学生が、図書館へ行き、文献を読み、まだ私が読んだことのないような新しい論文を読んできました、と報告に来るだけです。私がこんなに一生懸命下準備をしたって、そのほとんどは無駄になるんです。10年前と同じ講義をしたって、彼らはハッピー、それでは欲求不満は高まるばかりです。そんな事だったら、いったい誰と研究について語ればいいのでしょうか。自分が新しい文献を読んだって、いったい誰が関心を持ってくれるのでしょうか。これじゃあ講義をする意味がありません。これこそ問題です。英国の大学では、学生を選抜します。完璧な選抜過程、大学間の競争があるのです。高校を卒業すると、非常に複雑な評価に基づいた卒業証書をもたらすので

す。もし普通の大学に行きたいとすれば、高校では下から2番目程度のレベルの成績で卒業すればいいのですが、オックスフォードやケンブリッジなどのトップクラスの大学に行きたいとすれば、全学期を通じて最高レベルの成績を獲得していなければなりません。オックスフォードやケンブリッジに入る壁はこれ、最も低い大学に入る壁はこれ。大学間で学生たちに非常に大きな違いがあるのです。オックスフォードやケンブリッジで非常に難解な講義をすることの方がよっぽど簡単です。なぜならば、そこにいる学生は皆、学生全体のトップの1割に入るような優秀な学生ばかりだからです。さらに、そこでのトップの成績は全体の1%に入るといって、非常に高いレベルです。だから、学生の能力が様々にわかれて、大学の幅が非常にあるということになります。もちろん、優秀な学生の中には、そんなに有名ではない大学へ行くものもいます。そうでなければ、それはちょっと恐ろしいようなシステムですよ。いくらかフレキシブルというの、ある特定の大学を好きだという学生もいるからです。その大学のある街が大好きだとか、ある科目にはめっぽう強い大学なんだ、とかそういうこともあるからです。

例えばレスター大学のように、ある特定の学部が非常に有名だということがあります。レスターの場合は、都市史学部が非常に有名です。なので、本当に都市史が好きの人がいたら、その人はレスター大に行くべきなんです。実際、別の大学へ行ってトップレベルの講義を受けるといったことも可能です。しかし通常ほとんどの人は、最も低い大学から最も選抜性の高い

大学という序列に従って学生や教授の質が似通っており、全体として、そこで受ける教育的経験というのも序列により異なると考えています。もちろん学生たちの将来も、大学によってかなりバイアスがかかってきます。オックスフォードやケンブリッジに行けば、教育機関での就職、奨学金の獲得、様々な可能性についてのチャンスがより高まるのです。

もっと低い大学では、自分の分野でよい将来を築くことはとても難しくなります。しかし、学ぶ側の立場から考えるだけではなく教える側から考えると、もっと刺激的です。もし幸運にも、ケンブリッジで古典の授業を持つことができたとしましょう。5人の「将来の教授」たちがあなたの授業に出席し、非常に難しい質問を投げかけます。彼らはとても聡明で、非常に一生懸命学びます。もちろんケンブリッジにだって、頭はいいけれど単位を取るためだけに最低限のことしかしない怠惰な学生はいます。しかし、別の大学でだったら英語の書き方を教える程度のことしかできないかもしれません。レポートも書けないので、どうやって書いたらいいかを教えることに時間を費やして、それでも全然よいレポートにはならなくて。どうやって本を読み始めたらいいかとか、その本をどうやってレポートに引用したらいいかとか、文字通りこんなレベルのことに多くの時間を割くのです。その差は非常に大きいです。

オランダのシステムは選抜制ではありません。だから、行きたい大学にならどこにでも行けるのです。ただ、前段階にある学校の卒業証書でもって、あるレベルに達しているという証明があればいいのです。低レベルでも、大学はどこでも選択できるのです。幸運なことに、医学部以外はどこでも行けるのです。

**司会者：**大学間に階層分化がない、ということですか？

**ピントリフ：**ありませんね。

**司会者：**それはちょっと想像できませんね。

**ピントリフ：**そうです、だから何度も申し上げているように、問題があるのです。なぜならば、クラス内で学生間に非常に大きな差が生じてしまうからです。レポートも書けないような学生と「将来の教授」のような学生が、同じ部屋に座っているんです。ですので、どうやって教えたらいいかという現実的な問題が常に付きまとっているのです。読書リストを渡したとしても、これはレポートを書くための20ほどの文献が載っているリストなんです。ほとんどの学生は2つくらい読むだけです。2、3人が20全てを読もう

とするのですが、その20全部を読もうとする学生に向かって、君のような学生だけが単位を取れるよと言うことはできないんです。なぜならば、平均で2の成績があればほかの学生もパスしてしまうからです。ここが問題です。こういったことが問題の多い教育を引き起こしているのです。私は、単純に差別的な教育に賛成しているわけではありません。非常に聡明な学生にだけ力を注いで、残りを放っておけばいいわけではない。しかし、様々なレベルの学生に合ったタイプの教育を構築していく必要はあるのです。

学生たちに非常に難しい講義をすることは公平ではありませんが、講師が非常に良い講義ができるというのに、実際十分に学ぼうとしない学生ですら合格にしなければいけないとしたら、そんな講義は講師にとって公平ではありません。だから、私は誤りだと言っているんです。高校のようなところで、教育を様々なグループに分けることが必要なんです。高校でその学生に合った教育をする、それこそが私の思うところで、オランダのシステムはそうなってはいませんでした。そこでRMAに至ったのです。はじめはRMAには成績による区別があると思いましたが、RMAでも平均以上の成績があればいいのです。決してトップの学生というわけではないのです。

**Q:** オランダでも、システムを変えようとする動きが起きた、ということですか？

**ビントリフ:** ちょっとね。オナーズクラス（上級クラス）に関しては、今年始まったばかりだと思います。たぶん、非常に聡明な学生が志望することで、特別コースに入ることができると思います。民主国家ですから、選抜をしているなどとは言えません。政治的には、こういうことはやってはいけません。だから、「もし自分のことを優秀な学生だと思えば、上級クラスに行けます。ここではより難しい講義が行われています」と言うんです。すると面白いことに、学生の3割がこのクラスを選択します。これが、熱意ある学生と怠惰な学生を区別する、最初のサインなんです。そしてもちろん、熱意というのは知性よりも重要である場合が多いのです。彼らは一生懸命課題をこなそうとします。ただ、政治的な問題から、本当はオナーズクラスというのは7割、8割の成績が取れる学生のためだけのものだ、とは言えないんですね。オランダの極端な平等主義という政策に反してしまうからです。

ですから、学生たちに「自分たちを特別に価値ある学生と分類してみたら」と言うと、面白いことが

起きます。より一層研究に励む方を選択するようになるのです。課題に向かって頑張ろうという気になってしまうのです。ですから、こういった方法は政策的には正しいですね。今後の動向を見守っていきたくと思っています。しかし、大学が常に区切りを設けて差別的になる、ということはオランダではないと思います。

つまり、オックスフォードやケンブリッジやロンドン大、あるいはアメリカのトップクラスの大学へ行けば、教室にいる学生はとて知的で高度な議論をします。それは本当に刺激的です。こういった学生の前では、注意深く物事を考えなければなりません。なぜなら、彼らはいろんなものを読んできていて、質問をぶつけてくるからです。そしてもちろん、議論はどんどん広がっていきます。このような高いレベルの雰囲気や学問の中にいられるという意味では、彼らは有利です。それに、オックスブリッジではほとんど講義というものがありません。ほとんどないのです。ほぼすべての授業が個人指導やリーディングを通して行われます。つまりその方が効果的だからです。学生は、主に1人で本を読まなければいけませんので、ほとんどの学生が講義には全く出席しません。これは驚くべきことです。なぜなら、彼らが知識を創り出していかなければいけない、ということですから。彼らはアドバイスを受けますが、アドバイスを受けるために毎日座ってノートを取っているわけではないのです。彼らは知識を創造することを期待されているのですから、教師としてはただ、非常に選別されたこの問題のない学生集団と一緒にやっていけばいいだけのことなのです。ですから、こういった状況を皆さんもちょっとうらやましいと思われるのではないのでしょうか。

オックスフォードやケンブリッジなら、このような知性の集中が計り知れないほどありますし、そういう彼らに感銘を受けます。しかし、こんな教育システムをほかでやることはできません。だって、上位10%の学生だけ取って、あとは捨ててしまうなんてやり方ですから。一方で、実際に上位10%の非常に優秀な学生をとって、残りの学生に対しても同じ講義と一緒に教えようとするならば、それはかえって悪くなります。なぜならば、上位の学生たちは最良の教育を受けることができなくなってしまうからです。普通の学生たちを教える時間なんて実際ありませんし、本当のことを言えば、学生たちにレポートの書き方なんてことを教えるのは、時間の無駄だという思いもあります。博士や修士の学生たちは、私と同程度にそれくら

いのことはできるので、修士の学生を雇って、学部生たちに「自分はこうやってレポートを書いたんだ」と教えさせるのがいいのです。しかし教授たちにしてみれば、「オーケー、論文を書くプランを作ってきたんだね」と、見てあげなければいけない。それは私にとっては時間の無駄だし、実際私は論文指導は得意じゃありません。

非常に優秀な教師だからと言って、良い研究者というわけではない。人として優れていても研究なんかまったくできない人はしばしばいます。しかしそういう人だって、学生と一緒に学んでいくことは得意だったり、現実的な問題には良く対応できたり。それは持って生まれたものなのです。ただ、確かに修士の学生は、学部生にどうやって本を読んでいったらいいかということ教えるに十分な知識やスキルを通常は持っています。だってほら、学生がやってきて、「本を読んだんですけど、何が重要かわかりません。それで本を丸々一冊書き写すことにしました」なんて言うことがあるかもしれません。それが学部生の基本的なスキルなんです。でもその時に、私の本の読み方をその学生に教えるなんてことは、私の仕事だとは思いません。そんなことは院生のやることです。できれば、そのことで院生たちがいくらか収入を得られれば良いのですが。でも、今のシステムではそういったことが私の仕事の一部ですし、そんな中では熱い学問的な議論を戦わせるようなことはできないと私は思っています。

## 評価をめぐる

**Q:**でも、先生はまだライデン大学にいらっしゃいますよね。なぜですか？

**ビントリフ:**そうですね、PhDもたくさんいますし、フィールドワーク研究のためのサポートもいただいています。教育に関しての問題はあります。教えることは、その積み重ねを失敗すると、しばしばつまらないもの、困難なものになりがちなので、私は、1年生の概論なんかを教える時には、あまり考えすぎないようにしています。でも、大学院生からのサポートを得て学部生を助けていくといったような、もっと良いシステムであるべきだとは思っております。今のところはそれも私の仕事の一部になっておりますが。学生たちのオランダ語の間違いを正せ、なんて言われることすらあるんですよ。そんなこと不可能です。正しいオランダ語でレポートを書き直せだなんて、それこそ

私にとって問題です。すべての大学にはそれぞれの問題がありますので、おそらく私が英国のような別の国の大学へ行った場合、システムは今よりは良いのかもしれませんが、その大学をよく見てみれば、似たようなひどい問題があるでしょう。イギリス政府は、一部にはアメリカから引っ張ってきたような商業主義的なモデルを大学に持ち込んできていますから。

**司会者:**そうですね。確かに同じ問題があります。

**ビントリフ:**絶えず評価をされ続けますからね。ペーパーワークに追われる日々です。学生が問題を起こせば、いつ学生が相談に来たのか、いつ手紙を送ったのか、いつ次のアポを取ったのか、いつまた手紙を送ったのかと、何でも書き留めておかなければいけません。書類への記入に時間を取られ、そしてそれをもとに評価され、審査され、52ものさまざまな事柄を行ってきたことを示さねばならず、それじゃあまるで事務職員ですよ、教員じゃなくて。英国でも大きな問題となっていて、今では、ペーパーワークだらけになっています。後方支援を変革しようとしているのだと思いますが、前よりはよくなっているようですが、たぶん教員の時間の50%は今でもペーパーワークで、指導や研究ではありません。とても難しいですね。

オランダでもそっちの方へ進んでいるのが怖いんです。実際、このパワーポイントは院生に作らせたんですが、非常に公的な委員会の評価を受けるようになってきています。先に述べましたように、こういったメカニズムの中には、実際には良い教育とはなっていないことがあります。独立した評価機関を持つということは良い考えのように思われるかもしれませんが、その分野に関する知識が全くない機関が評価するというのであれば、それは災害と言えます。書類上は、より良いモニタリングコントロールを創るということになっていて、良いように見えるのですが、教育的にはそれは良い知らせとは言えないのです。日本のシステムも変わりつつあるのですか？ どんな感じか教えていただけますか？

**司会者:**そうですね、我々もイギリス型に移行しつつあります。つまり、いつも評価され続け、すべてのことが評価対象になる、ということです。

**ビントリフ:**そうですね。英国では何年も「どうやったろうまくいくか」という、トリックと言いますか、ゲームを学習してきたという気がします。ゲーム理論ですね。どうやって、管理側相手にプレイしていくかを学ばなければならない。たとえば、業績の刊行に対する非常に大きなプレッシャーがあります。毎年



各研究者は、発表した論文の長いリストを作らなければなりません。その中のいくつかは、ある決まったジャーナルに載せなければならないのです。だから、単に論文を発表すればいいだけじゃなくて、例えば、「 $\alpha$ 雑誌」に載せなければいけない、とかいうことになるわけです。それに、人に引用されるような研究をしたとすると、その論文を引用したのは何人かと問われるわけです。でも、我々人文系の人間にとって、それはとても難しいことです。なぜならそういうシステムではないのですから。理系だったらできます。でも我々の分野では、引用されるということはもっと難しいことです。それに3年に1冊は著書も出版しなければならない。精一杯の努力をして仕事をし続けたとしても、結局は、何本の論文が「 $\alpha$ 雑誌」に載って、「 $\beta$ 雑誌」に載って、何冊の本が出版されて、何人に引用されて、ということが公的な評価につながるのです。ですから、英国に行けばみんな年がら年中発表していますよ。よし悪しにかかわらず、何か出さなければいけないんです。

だからすごくたくさんのお本がありますし、どれが役に立つかを見つけるのが非常に難しい。だって、瓶とかパスタとかを製造する工場みたいですから。毎年さらに多くのパスタを製造しているみたいなものですよ。おいしいパスタかまずいパスタかどうかなんて関係ない。量が問題なんです。このシステムの大きな問題はこういったところにありますね。しかし、なんとかしていく方法が1つあって、研究成果をいくつか異なるジャーナルに載せていくんです。つまり、同じ研究を5回載せる。1回は日本の雑誌、1回はドイツ、1回は別のところへ、とね。もちろんちょっとずつ変えますよ。でも基本は同じ研究を数回使うんです。これでこのシステムに対抗できます。本当に良い研究なら何度も使えますからね。そして、毎月何か書かなければならないとしても良い質を保てるんです。

みんながやっていることは、5年以上かけて1冊の本を書くんですが、1章1章を1つの論文として出します。本のドラフト的な感じで。それから本として出版するんです。ですから英国では長年の間、アカデミックな世界はゲーム理論を学んできた、と言えるのです。管理側とのゲームの戦い方は、たくさん刊行物を生産することです。どれだけさまざまな研究をするかとか、どれだけ質の高い研究をするかとかは二の次です。どちらかと言えば多いということが大切で、良い論文かどうかではありません。わずかな、本当に良い論文は、(何度も発表することで)様々な読者の

もとへと届けられます。こういったことには私は反対ではありません。なぜなら、特に我々の分野には様々なコミュニティがあるからです。

たとえば考古学にしてみれば、「古典学雑誌」の中に古典考古学があるのですが、一方で、「古典学雑誌」を読んだこともない人によって、考古学の学術誌の主流が作られているのです。考古学への興味関心を集めた学術誌、考古学へもある程度の興味関心のある歴史の学術誌というのもありますから、歴史、古典、考古学など、発表する学術誌により読み手が異なるわけです。そして、どこかに発表すれば他の分野の読者には伝わらないということになります。ですから、自分の研究成果をいろいろなコミュニティに広げていくということは、悪いことではないと思います。

つまりドイツで発表すれば、ドイツ国外のこの発表を読んだことのない人にとっては、発表がなかったも同然です。なので、私は同じ論文をアメリカでも発表します。たぶん修正したり付け加えたりはするでしょうが。ですから、正確には同じ論文ではありませんが大筋は同じです。この2つのコミュニティ(ドイツとアメリカ)は重複しないとわかっているからです。全く異なる集団なのです。実際こういったことは、自分の研究をよりよく知ってもらうためにはよいことです。正当化できると思いますよ。確かに、こうすることによって研究評価は高まります。5本の論文と1冊の本、それらは同じ研究から来ている。こういったやり方、評価にビクビクしてダメになってしまうようにするやり方は、英国のゲーム的なアカデミーから学びました。

ダラムにいた時、指導に対する評価が始まる直前に、私はダラムからオランダに移ったんです。当時は、用紙に書き込んでファイリングしておくというものだったのですが、こういったことは2年前からやっておくべきことだったんです。でも実際にはやっていなかった。だから2年前に日付をさかのぼって書類を作成したんです。だから書いた書類には2年前の日付が記されたんです。委員会が来たとき、学生の進捗についての書類をすべて提出するように求められました。一人一人の学生と3回ずつ面談するんです。こんなことをしなければいけないんですよ。

各学生は、1年に3回、15人と面談して、研究結果に対する議論をしなければならないとされているのですが、もちろんこんなことしていません。難しすぎます。そこで、日付を変えた想像上の書類をでっち上げたのです。そして委員会が来たとき、「はい、面談

しました。ここに15枚の用紙があります」と渡すわけです。すべて先月作ったものですが、日付は5年もさかのぼっています。ちょっとこれは強烈な話かもしれませんが、研究者も生き残りを図らねばならないし、こんなこと薦められたことじゃありませんが、絶望的な状況に陥っているとすればトリックも必要になってくるわけです。

**Q:** そういう点ではオランダの方がよかったというわけですか？

**ビントリフ:** まあ、そうですね。でも、オランダもそっちの方向に向いてはいます。動き始めています。非常にバカなことだとは思いますが。というか、こんなおかしな話をするのも皆さんに学習してもらいたいからです。10年も前にこういったことが起きた国へ行って、「こういうことが起きたんだ、もうこんなことをしてはいけない」と言わなければいけないのです。最初にやらねばならないことは、「こんなことをしてはいけない」と言うことなのです。でも、実際にはこういった考えの下に動いているんです。英国での私の経験からすぐにでも言えることですが、こんなことをしてはいけないという動きは起きないでしょう。それどころか、「そうですね、私たちは学生の進捗について大きな問題を抱えています」と言い、新しく、毎年学生をモニターしなければならないことになってしまおうでしょう。学生の進捗をコントロールすれば問題はなくなりますから。

というわけで、学生の進捗について非常に多くの時間を割かなければいけません。もちろん、まともにやったら時間の使いすぎですから、ショートカットしようと思うわけですね。学生たちに進捗の自己モニターをさせ、デジタルポートフォリオを作らせるんです。ウェブ上で学生たちが自分のCVを作るんです。我々が求めている項目は全て彼らに記入させます。受講した講義、その成績、参加したワークショップ、自分たちの進捗についての感想、こういったものを記入して自分のポートフォリオを作るんです。我々がしなければならないのは、このポートフォリオをダウンロードして学生と面談することだけです。これなら時間が節約できます。こういうことなんですよ、皆さん。想像つきますか？ 何かご意見ありますか？

**司会者:** ポートフォリオのシステムは、今では大変普及してきたようですね。

**ビントリフ:** でも、何が起きたか知っていましたか？ 現実には何が起きたかなんて、想像つきますか？ 学生自身が作るポートフォリオという案がどう

なったか、想像できますか？ 実際、学生は作らなかつたんです。ほとんどすべての学生は、ポートフォリオなんて作ったことないんです。決まった日までに作れと言ったって、そんなもののウェブ上に存在しなかつたんです。20名のうち2人の学生が何かそれらしきものを作ったんですが、残りの18名はまったく記入しませんでした。こんなことはわかりきったことです。だって、バイト代を支払いでもしなかつたら、あるいは「ポートフォリオを作らなかつたら講義の受講を取り消すよ」とでも言わなかつたら、そんなことをするわけないですから。でも実際は、バイト代を払ったり受講を取り消すと脅すことはできないんです。

本当にそれはできないんです。単に「オーケー、講義は不可だ」と言うことはできます。でも「フォームに記入しなさい、さもなくば退学だ」と言うことはできないんです。学生たちも、我々がそう言えないことにすぐ気が付くんですね。そこで、もちろん学生たちは「まあ、これはやりませんよ」と言うわけで、ほとんど誰もポートフォリオを作らなかつたんです。何度も何度もミーティングを重ねて、結果がどうなるかわかつたんです。1年後には、このポートフォリオ案は静かに消えていきました。そして、二度とこれについて話が出ることはなかつたです。

人々の過去の経験からの評価も受けずにこういう考え方が出てくるのが問題です。皆さんにアドバイスできるとすれば、まずは英国に行くべきだということですね。あるいは英国から誰か呼んで、「オーケー、このシステムについてご紹介しましょう」と言ってもらおうのがいいでしょう。もちろん彼らの第一声は、「このシステムはやめた方がいい」でしょうが。そして彼らを政府関係者に会わせ、このシステムがどんなことになってしまうのかを政府関係者に伝えるべきです。イギリス政府でさえこの制度への賛意を引き戻し、「良いアイデアではない。失敗だった。もっと良いシステムを作ろう」と言い始めているのです。少なくとも英国から講演に来る人は、「このシステムをやり続けるということは、過ちを避けるためには注意深く導入していかなければいけないということを20年かけて学び続けるということになるだろう。なぜなら、20年間で多くのことがどんどん悪くなってきたからだ」と言うと思います。

この、どんどん悪くなってきていることというのは、これまでの経験全体を通して言えることです。この20年間について、わずかながら良いこともあります。それは、振り出しに戻って「これは間違いだっ

た。でも、これはおそらく悪くはない。これは機能していない。これは機能している」と判断できるからです。しかしすでに何年もたってしまいました。でも皆さんの生き残りのためには、やはり名古屋大学のトップに話をし、「英国の大学の副総長レベルの人は是非話し合ってください」と言う必要があります。そして英国の関係者に「25年間のこの極端なモニタリングのせいで何が起きたのかを語ってください」「何が良い経験で何が悪い経験だったのかを、我々にも教えてください」と言う必要があります。この場で私が語った修士課程の話がそういう意味を持っているとよいのですが。そうすれば、皆さんは私から何がよくて何が悪いのかを学ぶことができますし、私たちが進んだ方向のうちのあるものについては、あなたがたは避けることができる。もしかしたら、私たちよりもっと良いシステムを作ることができるかもしれないのです。

## 留学生について

**司会者：**今のお話とかなり異なることで質問があるのですが、先生の大学には留学生がたくさんいると思うのですが、留学生の増加に対応できるような特別な方策などはあるのですか？ つまり、留学生のための特別講義みたいなものですが。

**ビントリフ：**そうですね、オランダにはそれほど多くの留学生はいません。この点については少々立ち遅れていますので、適したお答えができるかわかりません。そうですね、今思い出したのですが、イギリスのレスター大学出身の同僚に会った時の話ですが、中国に1万人の学生がいるキャンパスがあり、教育に関してはとても革新的で、とても進んでいるそうです。今ではオランダも留学生を求めています。彼らを受け入れる準備がきちんと済んでいるとは思えないし、彼らの方にも留学資格に問題があります。ですので、願書を受け取ったとしてもその学生を評価できるとは限らないし、資格・証明書を持つ意味を理解できるとも限らないのです。どこの大学でどんな課程に在籍しているかなんて、すべて把握しているわけではありません。ですから、こういった点については少々立ち遅れていますので、こちらの大学に非常に適した準備の調った学生もいれば、いくらか準備プログラムが必要な学生もいます。教員の方でも留学生を指導するのに十分な経験を持っていないという難しさがあると私は思います。

大学の中には準備プログラムを持っているところも

あって、そこでは、留学生が6か月ほど先だって入学し、語学の問題点を明らかにしてから語学の集中講義を受けると思われます。これがいくらか留学生たちの助けとなります。その他、留学生たちの苦手分野がありますが、彼らの祖国では問題となるようなことでもオランダでは問題とならないようなことならたいいは大丈夫なので、すぐにでも通常のプログラムに参加できるのですが、そうでない場合は、6か月ほど先だって入門的な準備プログラムに参加してもらおうようにして、入学前の準備をするようにしています。

まずは、英語を上達させるような講義があります。あるいはコンピュータなどの授業です。しかし彼らにとっても役立つとは言えません。また、留学生同士が集まったり交流したりできるような留学生用の寮がありません。院生が勉強する場所や学部生の留学生寮もありませんので、お互いに交流したり助け合ったりできないのです。留学生たちは様々なバックグラウンドや要求を持っているにもかかわらず、オランダ人学生の真ん中に投げ出されたような状態になっています。

ですから私は、交流ができアドバイスが受けられるセンターのある、専用の留学生用のオフィスこそが本当に重要なサポートシステムであると思います。また、宿泊施設も十分に備えられていません。オランダでは、オランダ人でも下宿先を探すのに一苦労です。しかし、たとえばジャカルタから来てライデンでアパートを借りようとしたら、それこそ本当に大変です。幸運にも誰かの助けが得られれば住居も決まるでしょうが、こんな状況では留学生受け入れの準備ができているとはとても思えません。つまりは、徐々にではあるものの増えつつある学生を受け入れるには、たくさん問題があるのです。学生たちは講義をきちんと受けなければいけないし、でなければそれらのコースを受講するのに困難を感じてしまう。英語を理解する必要があるんだけど英語がわからない。しかし彼らは遠慮してそういうことを言うことができないんです。

**司会者：**講義のほとんどは英語でやられているんですね。

**ビントリフ：**ライデンでは、大学院の授業はすべて英語です。でも、オランダの大学では唯一です。ほかの大学では、今でもおもな言語はオランダ語です。

**司会者：**それは例外的だということですね。

**ビントリフ：**そうですね。例外的です。より国際的になろうとしているのです。しかし、ご意見がおありかと思いますが、ライデンで外国人学生として研究して

いる学生からは、いくらかの問題点があると言われて  
いますし、私もそう思います。

**Q:** まず、家を見つけるのはとても難しいですね、  
本当に難しい。

**ビントリフ:** そうですね、当局は、外国人学生の立  
場に立って「どうしたらいいんだろう？」なんて考え  
られないみたいですね。当局の人たちは、自分で方法  
を探して解決するものだ、もちろん解決法なんて簡単  
に見つかる、と思っているみたいです。

**Q:** 私も最初に部屋探しをしたときは、難民用の住  
居だったこともありましたが、市街地から遠くて自転車  
を買わなければいけなかった。しかし大事な点です  
が、考古学は研究できましたね。それも科学的な考古  
学、理論的と言うか全体的な理論と言うか、そこは良  
かったです。

**ビントリフ:** でも、MA 課程に入る前にオリエンテ  
ーションを受けた方がよかったんじゃないですか？

**Q:** そのようなものはありませんでした。

**ビントリフ:** もし準備コースを何か月か受講する機  
会があったとしたら、良かったと思いませんか？

**Q:** より良かった、と言うことですか？

**ビントリフ:** あの、私が尋ねているのは、それがあ  
った方がよかったかどうか……。

**Q:** それは、ずっと良かったと思いますよ。

**ビントリフ:** おそらく役に立ったと思いますよ。

**Q:** 背景的な知識は、学生により異なりますから  
ね。

**ビントリフ:** そうです。典型的な修士学生は、同じ  
大学で学部生をやっています。ですから、そういった  
学生は皆同じバックグラウンドを持って、同じ講義を  
受けています。ですから非常に易しいです。異なるバ  
ックグラウンドを持つ別の大学から来た場合、自分が  
学んだことがあるものもあれば、まったく学んだこと  
のないものもある。教え方だって異なるでしょう。つ  
まり、例えば考古学理論のようなものの場合、非常に  
専門化された分野であって、いつでもどこでも教えら  
れているようなものではありません。突然ライデン大  
学で学ぼうと思っても、ライデン大学ではすでに3年  
間の考古学理論が教えられていて、修士から入ろうと  
してもその修士の学生は、3年間のその知識をすでに  
学んだものとして期待されているわけです。でも「私  
には全く分からないことです」となってしまうわけで  
す。

だから6か月の準備コースのようなものがあって、  
学生と個人面談し、「オーケー、これは終わっている

けど、これは終わっていないね。言葉の方はどうです  
か？」ということができれば、おそらく良いものではな  
いでしょうか。こういう準備のために時間を割くべき  
なのです。でもまだ行われていません。しかし、こう  
いったことはおそらく非常に興味深くまた有用である  
と思います。今の状況の弱点はこういったところでは  
しょうか。それにプラスして、外国人学生が集え、経験  
を共有し、お互いにアドバイスを与え合う場所がない  
ということも挙げられます。別府では興味深い話を聞  
いたのですが、APU、アジア太平洋大学（立命館）の  
学生の50%は留学生だそうですが。

**司会者:** 日本では非常に例外的な大学です。

**ビントリフ:** そのようですね。なので、あの大学が  
やってきたことは知りたいと思います。最高50%も  
の外国人学生を集めるなんてすごい成功ですね。たぶ  
ん彼らは、一生懸命数多くの英語の集中的な指導をし  
ているんですよ。

**司会者:** しかし非常に実験的な大学であることは確  
かです。

**ビントリフ:** 実際、非常に多くの時間を割いて語学  
を教えているんですよ。ほとんどの科目の主要テキス  
トが英語ですし、だからと言って普段から気軽に英語  
を使用しているわけではないですよ。国際的なコミュ  
ニケーションや読解力を高められるように、そのた  
めに必要なものに向かっていくのにとっても大切なこ  
とです。ですから、彼らがどのようにしてやっているの  
か、そんなにたくさんの外国人学生の世話をどうやっ  
てしているのか、どうやって問題に立ち向かっている  
のか、2,3人どころじゃない、クラスの半分以上が日本  
人じゃないのにどうやっているのかを知るのには興味深  
いです。別府から誰か、例えば池口先生とかがこちら  
に来る機会があったら、ぜひ話を伺うといいですね。




**司会者:** 今日は、非常に興味深い話題につきまして  
たくさんお話しできました。実際、最初ビントリフ先  
生は、教育について話をするのを躊躇されていまし  
ましたが、実に熱のこもったお話しを伺うことができ  
ました。このワークショップにお招きできて、本当に良  
かったと思っています。

**ビントリフ:** 教育改善のための経費があるというの  
はいいですね。


**司会者:** 本当に先生には感謝しています。ありが  
とうございました。

**ビントリフ:** こちらこそ。お招きいただきありが  
うございました。

## Graduate School of Archaeology

09-04-2010 MA Introduction



Faculty of Archaeology
Universiteit Leiden. The university to discover.

## Master Programmes

- 1 year Master of Arts (MA, MSc)
  - 12 specialisations
- 2 year Research Master (MA, MSc)
  - 4 tracks

Graduate School – Master specialisation – Research Master tracks – -Questions
Faculty of Archaeology
Universiteit Leiden. The university to discover.

## Graduate School

Dean:	Prof. dr. Willem Willems
Director:	Prof. dr. Harry Fokkens
Head Education Departement:	Drs. Audrey Aijpassa
Assistant:	Laura van Hoof
Study coordinator / quality officer:	Drs. Femke Tomas
PhD policy officer:	Dr. Roswitha Manning
Student's Administration Office:	Jaap Hoff, Olga Yates

Graduate School – Master specialisation – Research Master tracks – -Questions
Faculty of Archaeology
Universiteit Leiden. The university to discover.

## Master specialisations

1. Palaeoecology	Van Kolfshoten
2. Material Culture and Artifact studies	Van Gijn
3. Heritage Management in a World Context	Willems
4. Palaeolithic Archaeology	Roebroeks
5. Prehistory of North Western Europe	Fokkens
6. Field Archaeology	Bausch
7. Classical Archaeology	Bintliff
8. Archaeology of the Near East	Akkermans
9. Archaeology of Egypt	Versluys
10. Archaeology of Asia	Bausch
11. Archaeology of the Caribbean and Amazonia	Hofman
12. Archaeology of Mesoamerica and the Andes	Jansen

Graduate School – Master specialisation – Research Master tracks – -Questions
Faculty of Archaeology
Universiteit Leiden. The university to discover.

## Graduate School: Tasks

- Responsibility for the education programme (MA, RMA, PhD)
- Organisation of the general part of the programme
- Organisation of workshops (RMA – PhD)
  - Archaeological Forum: Tuesdays (biweekly), 4-5 pm
  - Graduate School workshops (1 or 2 each year)
- Progress monitoring of the students

Graduate School – Master specialisation – Research Master tracks – -Questions
Faculty of Archaeology
Universiteit Leiden. The university to discover.

## Structure Master programme

<b>Structure:</b>	<b>EC</b>
General disciplinary course:	
<i>Advanced Methods and Theory</i>	5 EC
<i>Thesis</i>	20 EC
Specialisation I:	
<i>Specialisation seminars</i>	15 EC
Specialisation II:	
<i>Specialisation seminars</i>	15 EC
Supporting Discipline:	
<i>Any other Master course of your choice</i>	5 EC
Total:	60 EC

Graduate School – Master specialisation – Research Master tracks – -Questions
Faculty of Archaeology
Universiteit Leiden. The university to discover.

### Specialisations and Supporting Discipline

The courses that may also be attended as Supporting Discipline are coloured blue.

#### RMA-courses

- can only be followed on request (exam-committee and track leader)
- students must meet the RMA admission requirements (BA average 7,5 and thesis mark 8)

Faculty of Archaeology

Universiteit Leiden. The university to discover.

### Palaeoecology

#### Courses EC

Climate change during the Quaternary Period in Europe	5
Seminar Ecology	5

#### **And choose one out of the following two courses**

Tutorial Archaeozoology/Mammalian Palaeontology	5
Tutorial Palaeobotany	5

Faculty of Archaeology

Universiteit Leiden. The university to discover.

### Prehistory of North Western Europe

#### Course EC

From Megalith to Celtic field	5
Seminar Roots of the Round Barrow	5
Tutorial and discussion of current issues	5

Faculty of Archaeology

Universiteit Leiden. The university to discover.

### Material Culture and Artefact Studies

#### Courses EC

Seminar: theoretical approaches in material culture studies	5
Tutorial in material culture studies	5
Methods and Techniques in Material Culture Studies	5

Faculty of Archaeology

Universiteit Leiden. The university to discover.

### Palaeolithic Archaeology

#### Courses EC

Palaeolithic Europe: an introduction	5
Seminar Human Origins: an integrative approach	5
Seminar Neanderthal Biogeography	5

Faculty of Archaeology

Universiteit Leiden. The university to discover.

### Classical Archaeology

#### Courses EC

Greek Sculpture in Context	5
Houses and Society in the Greco-Roman World	5
The World of Late Antiquity	5

*Please note: Mare Nostrum (Tuesdays, bi-weekly)*

Faculty of Archaeology

Universiteit Leiden. The university to discover.

### Archaeology of the Near East

Courses	EC
Environmental History of the Near East	5
Urbanisation and State Formation in the Ancient Near East	5
Neolithisation in the Near East	5

Please note: Mare Nostrum (Tuesdays, bi-weekly)

Faculty of Archaeology Universiteit Leiden. The university to discover.

### Archaeology and Antropology of Mesoamerica and the Andes

Courses	EC
<i>Choose 3 out of 4:</i>	
Ancient America: an overview	5
Art, Cosmology and Ritual	5
Mixtect living community and cultural heritage	5
Andean culture history	5

Faculty of Archaeology Universiteit Leiden. The university to discover.

### Archaeology of Egypt

Courses	EC
The Origins of Egyptian civilization	5
Themes in the Archaeology of Pharaonic Egypt	5
Hellenistic and Roman Egypt: the archaeology of culture contact	5

Please note: Mare Nostrum (Tuesdays, bi-weekly)

Faculty of Archaeology Universiteit Leiden. The university to discover.

### Archaeology of the Caribbean and Amazonia

Courses	EC
Ancient America: an overview	5
Mobility and Exchange in Ancient America	10

Faculty of Archaeology Universiteit Leiden. The university to discover.

### Archaeology of Asia

Courses	EC
Asian collections in the Netherlands	5
Reading Texts: Formative processes in Asia from Prehistory to Early Historic periods	5
Current Issues: Interaction and Change	5

And for Supporting Discipline also:  
Sharing the tales of the Buddha

Indonesian (Sanskrit) inscriptions in their (art) historical context  
(for more information: E-prospectus)

Faculty of Archaeology Universiteit Leiden. The university to discover.

### Heritage Management in a World Context

Courses	EC
Discovering the concepts of Archaeological Heritage Management*	5
Exploring the dilemmas of Archaeological Heritage Management	5
Experiencing Archaeological Heritage Management in practice	5

\* Except excursion for Supporting Discipline students

Faculty of Archaeology Universiteit Leiden. The university to discover.

### Field Archaeology

Courses	EC
Seminar Prospective Field Archaeology	5
Seminar Research Strategies Field Archaeology	5
Fieldwork in practice: internship	5

Faculty of Archaeology

Universiteit Leiden. The university to discover.

### Thesis: time table

Ideal time frame for the MA thesis

- November/March: choose a subject
- December/April: discussion of structure, sources, literature
- < 1 February/July: problem statement, research questions, research method
  - Discussion of the chapter (max. 15 working days later)
  - Written approval
- < 1 May/November: submission first draft
  - Discussion first draft
- < 15 June/December: submission final draft in twofold to the two readers
  - Assessment of the thesis, submission to the exam committee (max. 15 working days later)
  - Submission to the education office (within a week)
- The oral exam will be scheduled in accordance with the thesis supervisor

(Graduation days: first week of September and February)

Graduate School - Education Programme - Thesis - Programme Evaluation

Faculty of Archaeology

Universiteit Leiden. The university to discover.

### Thesis

#### Structure and assessment criteria

Thesis Information and forms on:

→The Graduate School blackboard module

And on the Faculty website:

- Masterprogramme
  - Standards and Procedures
  - Thesis

Graduate School - Education Programme - Thesis - Programme Evaluation

Faculty of Archaeology

Universiteit Leiden. The university to discover.

### SafeAssign

- Starting September 1<sup>st</sup> 2009
- Plagiarism prevention service
- Check all your papers and thesis
- Hand in SafeAssign report with paper and thesis

Faculty of Archaeology

Universiteit Leiden. The university to discover.

### Thesis Supervision

- One supervisor, sometimes second supervisor (additional expertise)
  - Discussions on subject and structure
  - Final assessment
- Two readers
  - Quality control
  - Control of the assessment proper
- Evaluation of the assessment by the exam committee (signature)

Graduate School - Education Programme - Thesis - Programme Evaluation

Faculty of Archaeology

Universiteit Leiden. The university to discover.

### Programme evaluation

- Questions?
  - > Consult study advisor Femke Tomas (Mondays 10-12 AM or by appointment)
- Problems?
  - Education committee:
    - > Contact the MA or RMA student representative: Denise de Haan (MA) - d.de.haan@umail.leidenuniv.nl or Floris Keehnen (RMA) - f.w.m.keehnen@umail.leidenuniv.nl

Programme evaluation meeting

- 1st semester: February
- 2nd semester: May (exact date to be announced)

Graduate School - Education Programme - Thesis - Programme Evaluation

Faculty of Archaeology

Universiteit Leiden. The university to discover.



### Last but not least...

- **Enroll through Blackboard**  
(Faculty of Archaeology>Master) for each course you will be attending
- **Graduate School Newsletter:**  
please check your u-mail account regularly
- Please also check the notice boards in the Archaeology building

Faculty of Archaeology

Universiteit Leiden. The university to discover.

### Structure Research Master programme

<b>Year 1</b>	
- <b>a. General disciplinary courses (choice of 2 out of 3)</b>	<b>10 ECTS</b>
1. Advanced methods and theory	5
2. Workshops / Forum / Research Day	5
-	
- <b>b. Specialization</b>	<b>40 ECTS</b>
Seminars	25
Thesis (first two chapters)	15
-	
- <b>c. Supporting disciplines</b>	<b>10 ECTS</b>
- <b>Total</b>	<b>60 ECTS</b>

Graduate School – Master specialisation – Research Master tracks – -Questions

Faculty of Archaeology

Universiteit Leiden. The university to discover.

### How to become a Research Master?

- Average of 7.5 for the Ba
- 8 for the thesis
- Write a letter of motivation to the Graduate School Board (Aypassa)
- Interview with the admission committee (Audrey Aypassa, Bouke van der Meer, Harry Fokkens + track leader)

Graduate School – Master specialisation – Research Master tracks – -Questions

Faculty of Archaeology

Universiteit Leiden. The university to discover.

### Structure Research Master programme

<b>Year 2</b>	
- <b>a. General disciplinary courses</b>	<b>10 ECTS</b>
1. Epistemology	5
2. Workshops / Forum / Research Day	5
-	
- <b>b. Specialization</b>	<b>40 ECTS</b>
Seminars	20
Thesis	20
-	
- <b>c. Supporting disciplines</b>	<b>10 ECTS</b>
- <b>Total</b>	<b>60 ECTS</b>

Graduate School – Master specialisation – Research Master tracks – -Questions

Faculty of Archaeology

Universiteit Leiden. The university to discover.

### Research Master tracks

Human Origins	Roebroeks / Van Kolfsochten
Prehistoric farming communities	Fokkens / Fontijn
Town and country in the ancient Mediterranean and the Near East	Akkermans / Bintliff
Native American religion and society	Hofman / Jansen

Graduate School – Master specialisation – Research Master tracks – -Questions

Faculty of Archaeology

Universiteit Leiden. The university to discover.